

亀戸物語

房宗治

「ふざけるんじゃないね！」

良治の口から久しぶりに若若しい怒りの声が漏れた。座っている横のテーブルには新聞が投げ捨てられている、一面に大きく、アメリカに行った野党の代表者が「憲法改正、自衛隊の海外での武力行使容認」と掲載されていた。

二 四年夏、異常な暑さが続いている。

「戦争の哀しさも、酷さも知らねえ連中が、勝手なことを抜かすんじゃないねえ」

良治は窓から遠くをみつめた、近くの公園では子供たちがあそんでいた。

六 年以上前、東京大空襲で亡くなった兄の子、亘と同じくらいの年だろうか。子どもたちの歓声が良治の怒りを、「どんなことがあっても止めなくては、戦争は始まったら最後止まらない」との決意に変えるようだった。

「ふざけるんじゃないね！」

あの時も、良治は同じことを胸のなかでつぶやいていた。二十二歳になった夏のことだった。「誰が勝手に決めやがったんだ…戦争をしてくれなんて誰も頼んじゃないねえ」。夕エが心配そうな顔でみていた。「今日は泊まるよ」といったとき、フツと白い歯をみせて嬉しそうな顔をした夕エ。今日はゆっくり話をしようと思ってきたのに、怒りの波がその先にやってきてしまった。

怒りの原因は、兄の秀夫が出征したことにあつた。

父の後を継いでメッキ屋になろうと、父から必死に技術を教わっていた兄。一人前の職人になるには十五年はかかるといわれる技術だ、メッキ液の濃度、ニッケルとクロムの仕上げの微妙な違い、研磨技術。それら一つ一つを兄は父から学んでいた。兄は結婚もし

子供もでき、父も「一人前になった」と喜んでいた矢先のことだった。

その兄に赤紙が突然舞いこんだ、届いた赤紙を手に立ちつくす兄、険しい顔で赤紙に見入る父、兄嫁の雪絵が五才になる巨を抱きしめて座りこんでいた。

出征は数日前の朝のことだった。真面目な兄は近所の人たち一人一人に丁寧に頭を下げると、そのまま招集先の部隊に向かおうとした。父は真っ直ぐに兄の顔を見つづけ、母と兄嫁の雪絵は巨の手にぎっていた。

「バンザイ、バンザイ」が繰り返された。兄が背を向けて歩き出したとき、みんなの陰で急に見えなくなった父親の姿に驚いたのか、「とうちゃん、行くなー」と突然巨が泣き出した。兄嫁があわてて抱きしめ、声をおさえようとしているのが見える。そんな巨に、隣のおばさんが小さな声で「ほんとになー、ほんとになー」とささやいてくれた。祭りのときには子どもたちにも団子をくれたおばさんだ、良治はそのおばさんの優しさと勇気が嬉しかった。誰かに聞かれたら憲兵に引っ張られるのに。

それにしても、メッキ工場の後継ぎ息子を兵隊にとつて後をどうしろというのだ。次男の俺にやれというのか。俺にはそんな難しいことはできない、勝手に人の人生を決めるな。東京の下町、亀戸の東にある良治の家は、家族の棟、メッキ工場、研磨工場の三棟からなっている、良治の父が母とともに一代で築いた工場だった。父は町会の役員なども勤め、近所の人たちから「旦那さん」と呼ばれて信頼されていた。そんなささやかな幸せを戦争は根底から崩しはじめている。良治の怒りは納まらなかった。

それにしても、アメリカと戦争をはじめてからどうも様子がおかしい。真珠湾攻撃は大勝利だというが、あれからモンペやゲートルをはいた人間ばかりが街にあふれ色気がなくなつた。味噌や醤油が切符配給となりしみったれてきた。戦争に勝っているはずの日本にアメリカの爆撃機がやってくる。「欲がりません、勝つまでは」とやたら我慢が押し付けられる。

「ふざけんじゃねー、戦争してくれなんて誰も頼んじやいねえ」

同じことをぶつぶつ言いながら良治は飲みつづけていた。もう、酒が水のように感じる、相当酔っていることが自分にも分かる、でも飲まずにいられたかった。

良治がタエがいる洲崎の遊郭・千田楼に上がったのは、夜七時頃だっただろうか、もう九時近いからかなり飲みつづけている。やりて婆も良治がタエの馴染みであり、料理も気前良く頼んだので、部屋に顔をだすこともない。良治はタエにくだくだと話しながらの

み続けていた。

「もう、お酒やめにしましょうよ」、タエが遠慮勝ちに言った。タエの声は悲しそうだった。良治はふと自分に戻った、これ以上タエを悲しませたら俺は人間じゃねえ。「タエの苦勞に比べたら俺なんて…、ごめんよ」、そう言いながら良治は素直に杯を置いた。

タエと馴染みになって半年になろうとしていた。

良治は石川島の社外工として働いていた。精密な技術が必要なメッキの仕事は良治にはむかなかった。気持のおもむくまま真っ直ぐに、ときにはいいかげんに生きる良治だ。父も母もそんな良治の気質を見越して、外で働くことを認めていた。石川島の社外工の仕事はきつく危険も多かったが金にはなった。そして先輩に誘われて入ったのがタエのいる店だった。

洲崎は良治の気性にあっていた。電車を下りて洲崎橋を渡ると別の世界に入ることができる。四方を海と川で囲まれ、戦争、戦争の社会と遮断されている。華々しくはないが生活の底を流れるような活気がある。「吉原大名・洲崎半纏」と昔から言われたが、近くの木場で働く川波、船頭・荷揚沖土や工場労働者を相手にしているせいか、娼妓は多少気が荒いが気取りなく良治は好きだった。良治の先輩で洲崎の娼妓と馴染みになり所帯を持った者もいる。

タエは千葉の銚子の出だった。亀戸の紡績工場に勤め一人前になった頃、漁師をしていた父が嵐に巻き込まれて死んだ。それまで使っていた比較的大きな漁船が軍に供出させられ、無け無しの金を叩いて小さな船を買い、風の強い日に無理して沖に出たためだった。

タエの下には第三人、妹一人がいた。残された母と弟や妹たちが暮らしてゆくにはまとまった金が必要だった。タエは「良い勤め口があるよ」という口入れ屋の紹介でこの世界に入ったという。仕事が娼妓だと分かり逃げようとしたが、口入れ屋から貰った金ももう銚子に送ってしまったている、後にはもどれなかった。

良治が先輩に連れられて洲崎に遊びに来たのは、タエが娼妓となって一月ほどの時だった。その日良治は給料日だった。

店に出ていたタエを見た瞬間、良治はなぜか切ない気持ちになりタエの客となった。黙って酒を飲んでいる良治に、「あなた、川筋の人」とタエが聞いた。頑丈そうな良治を見て、木場で働く人間とおもったらしい。「石川島さ」、「そう…」、「労働者だぜ」、良治はその頃覚えた労働者という言葉を口にした。勤め人というと何か上品で、労働者というと

何か下品で貧乏という感じがあったので、自分を労働者にしたのだった。「私も労働者だったのよ、亀戸の紡績工場で…」、タエは嬉しそうに話した。

タエは普通の娘らしい雰囲気はまだ残っていた。良治は思わず「どうしてこんな商売にはいったんだ」と聞いてしまった。タエは一瞬黙った。その様子に「ごめんよ、無理して話さなくていいんだ…」と良治が謝ると、タエは小さな声で自分のこれまでを話した。翌朝、「こんなにゆっくり話したの久しぶりだわ、ありがとう」、タエが頭を下げた。

それから良治はタエのもとに通うようになった。

良治がタエの前で荒れてからしばらくたった。

街では「欲しがりません勝つまでは」「月月火水木金土」などの言葉と歌が流行っていた。「誰のために我慢しろというのだ、誰のためにそんなに働けというのだ」、良治はいつも怒っていた。でも兄が出征したからには家業のメッキ屋の仕事も覚えなくてはならない。父はそんな良治に、何も言わずに技術を一から教えてくれた。

メッキ工場は日立の大きな工場近くにあった。空き地や草むらがあり、トンボとりができ、少し行くともう中川だった。中川は東京湾に通じ、また、その中川から北十間川が隅田川に通じているので、東京湾があげ潮になると家の近くの北十間川にはボラがあがってくる。ミミズを掘って餌にすると面白いほど釣れた。潮が濃くなると真水の魚が苦しくなると川面にでてくる、ブクブクと泡をだすのすぐ分かる。タナゴなどは橋の上から網ですくうことができた。泳ぎたくなれば中川へゆけばいい。「欲しがりません勝つまでは」などと聞くと、良治は思いきり中川で泳ぐか、のんびり釣り糸をたれてみたくなる。

良治が工場でそんなことを考えていると、「よう、元気か」という声がする、良治が「あんちゃん」と呼ぶ幼な馴染みの加藤明だった。加藤は良治より三つ年が上で、小学校の時から学校一の秀才だった。良治は小学校に入ったときから成績はいつもビリで、喧嘩早く、問題児という対照的な二人だったが、何故か明は良治とよく遊んでくれた。チャンバラ、メンコ、かくれんぼ、釣り、泳ぎ。近所のおおばさんたちはそんな二人を、「反対同士で丁度いいんだね」などと冷やかしたが、明はそんなことは気にせず良治を弟のように可愛がってくれた。それは今も続いていた。明は来年の春には大学を卒業し、おなじ町内の小木診療所の娘、恵さんと結婚して診療所を継ぐことになっていた。明は勤め人の子供で、家は貧乏だったが、明の秀才ぶりに惚れた恵の父親が明の父親と話し合ったうえで、後を継ぐことを条件に明の大学の学資をだしていた。それは近所でもあたりまえの話しになって

いて、「明が医者になったら安心だ」と好感をもたれていた。恵も幼い頃から良治たちの遊び仲間だった。色の白いふっくらとした顔立ちで、いつもにこにこ笑っていた。誰にも優しく女の子たちの遊びの中心だった。良治は一つ上の恵を「恵姉さん」と呼んでいた。

「少しは、慣れたかい」、「体を使う仕事ならいいが、ここの細かい仕事では」、「そうだよな」明は笑いながら良治の顔をみた。

メッキ工場のなかには雑然としていた。工場はスプーンやコップなど日用品を扱っていたので、それなりに忙しかった。良治の父親は「メッキはただ光っていいんじゃない」と良い品物をつくろうとしたが、戦争で日用品不足のなか、光っていれば品物は売れた。「こんな日は八ゼでも釣りたいな」「ウン」、今なら夏場の小さい型が良くつれる。から揚げにして醤油をかけて食べると美味しい。「恵姉さん元気」、「うん」

もう亀戸水神様のお祭りが近い、昔、水害の無事を願って建てられたという水神様は、広い敷地に樹木が茂り良治たちの遊び場だった。祭りには屋台が出て餅やベッコウ飴などが売られる。御輿もでる。大人だけでなく、近所の人たちが樽などで作った子供御輿も出る。練り歩くと、地域の人が弁当やお菓子で気合を入れてくれる。良治は水神様のお祭りが大好きだった。

しかし、今年になつて、日本軍がガダルカナル島からの撤収を開始した。戦争は激しくなり鉄が不足し、銀座の街路灯が撤去され、後楽園球場の鉄製椅子も撤去されて軍に供出されたという。今年は、どんな祭りになるのか良治には不安だった。

二、

その年の九月、御前会議が開かれ絶対国防圏が設定された。そして兵力を補うため、政府は学生の兵役猶予を停止し、学生を軍隊に狩り出すことにした。

夏も終り、明が学校に行くと、学校は「出陣学徒壮行大会」に参加するよう指示した。各大学から入隊するものを集めて明治神宮外苑で壮行大会を実施するのだという。

「生きて帰れない」、明は思った。空襲の混乱にそなえてライオンなどが毒殺されていた。そこまで追い詰められた日本がアメリカに勝てるはずはない。しかしどうすれば良いというのだ、国を守り、家族を守り、恵を守るためには戦うしかなかった。

壮行大会には三万人の学生が参加した。スタンドは見送る学生、応援参加の女子学生、

教職員、父兄など十万人で埋め尽くされていた。雨が降りシブキが冷たい。明は恵の姿を探したが霞んで見えなかった。各校の校歌、「海ゆかば」の斉唱、そして宮城へと向う。明の心に残ったのは「前途ある若き諸君を、今痛憤の思いをもって戦場に送る。今回の政府の措置は、まさしく千載の痛恨事とせねばならぬ。願わくは諸君、命を大切に、生きてふたたびこの教室に会わせんことを」と述べたある大学教授の送辞ぐらいだった。宮城前の砂利の音に、明は自分を恵から引き離し、戦争に追いやる者への怒りを感じ、思いきり地面に足をたたきつけた。

良治はその日、恵と一緒に明治神宮外苑のスタンドにいた。「あんちゃん、やめて帰ろう」、遊び終わった夕暮れ時のように、良治はそう言ってスタンドから駆け下りたかった。学校を卒業し、恵さんと一緒になり、診療所を継いで人の命を大切にしようという明さんが、何故戦争にいかなくてはいけないんだ。横では恵姉さんが白いハンカチを振りながらびよぬれの姿で立ち尽くしている、ハンカチが必ず明さんに見えていると信じているかのよう。その姿に、良治の怒りは悲しみに変わった。

明は海軍を希望した。そして十二月の初め、横須賀海兵団に入団のため亀戸を出発した。

明の入隊後、良治の身の回りで二つの大きな出来事があった。一つは、良治にも赤紙がきたこと、もう一つは戦局打開のため船舶増産が必要となり、石川島造船所に大勢の工員が配置され、そのため洲崎の遊郭がその工員宿舎となったことだった。洲崎警察に集められた楼閣の主人たちは、軍の要請を直ちに受け入れた。そのためタエの身の振り方が問題になった。多くの楼閣は、同じ商売を続けるために、立川、千葉県の茂原、茨城県の竜ヶ崎に移り、いずれも軍の近くでそうした商売をはじめた。娼妓も移り住むことになっていたがタエはこれを機会に辞めたいという。タエの楼主からの借金はもうなくなっていた。良治は賛成だがその後の相談をする時間がなかった。良治の兵隊検査が迫っていた。良治は亀戸のメッキ工場の住所を書いた紙をタエに渡し、「お袋に話しておくから相談しろ」と言って別れた。

徴兵検査は屈辱的だった。性病の有無を調べるため軍医の前で裸になり男性のシンボルをいじくりまわされる。四つんばいになり肛門の病気を調べられる、結果は甲種合格だった。

召集令状には横須賀の海兵団入隊とあった、明と同じ場所であることが救いだっ

出征の日、母は仕事でザラザラとした両手で良治の手を包み込み「手柄なんか立てなくていい、弾丸を避けて生きて帰っておいで。お前らしくいいかげんに要領良くやって、必ず帰ってくるんだよ」と良治の耳に囁いた。「お袋は、俺のこと良く知っている」と良治はおかしかった。父は痩せた体を真っ直ぐに立て近所の人たちにあいさつをしている。そして、良治が出発すると目をしばたいた。

軍隊生活は良治が想像したとおりだった。「軍隊に入ったらバカになれ」という誰かの言葉を思い出し、徹底して実行した。

海軍体操は馬鹿げた訓練の典型だった。一回三十分もかかる単純な運動を延々と繰り返す。精神を鍛えるからと殴る、食事を抜く。重装備で五キロ、十キロ走らせる。柱にかまらせ蟬の鳴き声をさせ腕の力がなくなり床に落ちるまで罵倒する。腹が立ったが、こんな連中に腹を立てるだけ損だと、真剣な顔をわざと創って良治は黙って従がった。ただ人間の心情まで踏みこむ軍隊のやり方には怒りと情けなさでどうすることもできなかった。

ある日、一等兵全員が召集されたときのことだ。「いよいよ出陣か」と良治は思った。幹部は「今日一日は演習はない、現在の覚悟を家族にしたためておくように」と話した。

誰もが最後の家族への手紙と思った。みんな部屋に戻り家族への手紙を書いた。良治も手紙を書き出したが、ふと、「この手紙は必ず幹部に読まれるはずだ、下手なことは書けない」とおもい、ちよつと考え「天皇の赤子として国のために死ぬのは光荣」と書き、ペツとツバを吐いた。午後になると周りの様子がおかしくなった。手紙を書いた仲間の何人かが次々と本部に呼び出され、顔を腫らし、鼻血を流して帰ってくる。聞けば竹刀でぶんどられたという。そうした人間の一人に手紙の内容を聞いてみると「聖戦とはいえ、若い自分が老いた両親を残して先立つのは残念だ」と自分の心情をつづつたのだという。

「この戦争は必ず負ける」、良治は思った。仲間を信頼できない組織は必ず負ける、これは喧嘩のなかで良治が会得したことだった。「こんな軍隊のために、俺は絶対死なない」、良治は心に改めて誓った。

三

良治は横須賀の軍で明にあった。明はもう軍医見習として働いていた。

「よう、元気か」、明は良治を見ると亀戸の時と同じように声をかけてくれた。良治は嬉しかった、久しぶりに人間に会った気がした。しかし慣れた態度をとってはいけない、明は上官だった、幼友達でも軍隊では親しい態度は許されない。明に迷惑がかかる。明もそんな良治の心の動きをすばやく読み、人の目を注意し、そして誰もいないところでは亀戸時代と同じように色々なことを話しあった。

「ひでえところだ、軍隊はもたねえぜ」、ある時明は小声でいった。

「だって戦地から帰ってきた耳が聞こえないという病人を診たんだ、どこも悪くない。そこで『帰国を命じる』と言ったら、『ありがとうございます』と言うんだ、耳が聞こえない患者がだよ」、「それで……」、「お可笑しくなって『銃後の勤め、大事にしてください』と言うと、『わかりました』と答えるんだ」、「……」、「勿論、帰国してもらったよ、よっぽど軍隊が嫌だったんだろう」、「明さんらしいや」、良治は笑った。

明には、通信担当などからも色々情報が入るらしかった。

「おい、大本営発表はありゃウソだよ」、「何で」、「うちの通信のところには、負けの情報ばかりだ」、「……」、「もうすぐ、日本は負けるね」、明は、そんなことも良治に囁いた。

そんな明が、結婚のため一時亀戸に戻ることになった。東京も空襲に襲われるようになり、不安を感じた恵の父親が、早く二人を結婚させようと、知り合いの軍の上部の人に頼み込んだのだ。明は数日間軍を離れただけで帰ってきた。

二人だけになる機会があった。「明さん、おめでとうございます」、「うん、でも結婚はしなかったよ」と明は良治に答えた。

「東京駅に下りるとね、首から白い布につつまれた木箱をつるした若い婦人たちに会ったんだ。夫の遺骨を抱いて、靖国神社にお参りした帰りだったのかもしれない。そのとき誰かの、こんな詩が頭に浮かんだよ。

白い箱にて 故郷をながめる

音もなく なにもなく

帰っては きまされたけれど

……

骨は骨

骨を愛する人もなし

骨は骨として 勲章をもらい

高く崇められて ほまれは高し

なれど 骨はききたかった

絶大な愛情のひびきをききたかった

.....

「こんな姿に恵をさせてはいけない、俺はそう決心した」、「でも、恵さんのお父さん、お母さんが大変だったでしょう」、「お父さんは、『死ぬのがわかってるからこそ、結婚して、一時でも恵を幸せにし、そして私たちを安心させてくれ』と言うんだ」、「お母さんは、『泣いてばかりいてね』、「よく分かってくれましたね」、「私は結婚して、出陣し、それで死んでも満足です。でも、恵さんは、その後の永い時間を生きなくてはならない。私は遺骨で帰っても、恵さんに話しかけ、助けることはできない。そんな寂しい永い時間を恵さんに過ごして欲しくない、と言ったよ」、「.....」、「それでも、お父さん、お母さんが結婚して欲しいと言うんだ」、「.....」、「そしたら、恵がぼろりと涙を落としてね、お父さんがわけを聞くと、恵が『結婚できないのが悲しくて泣いたのではない、そこまで私のことを考えてくれている明さんの優しさに泣いたんだ』と言う。それで両親が納得してくれてね。」

良治には、温厚な恵の父親と母親の顔が見えるようだった。

「恵が私に小さな和紙を渡して、何か書いて欲しいというんだ」、「.....」、「勇壮な言葉も書けなくてね」、「何を...」、「大切な恵とだけ書いたよ」、「.....」、「お父さん、お母さんは何が書いてあるのか知りたかったようだけど、恵は和紙をたたむと胸にしまい、『生きて帰ってください』と言い、微笑んでくれたよ」。明はそんなことまで良治に話してくれた。良治は何も言えなかった。

その年の秋、良治と明に出撃命令が来た。

米軍がレイテ島に上陸し、日本軍は制空権も制海権も失い、断末魔ともいえるなかでの出撃だった。十三隻の輸送船団がフィリッピンをめざした。船倉は通路以外は立って歩けないほど詰まっている。良治は薄暗い棧敷の上で救命道具をつけ、黙って暗く重い空気を見つめていた。同じ船に明が乗っていることを考え、二人で遊んだ亀戸での釣りや祭りのことを何度も思い返した。

フィリピンに着く前の何度かの攻撃は無事通過したが、フィリピン近くで魚雷攻撃を受け、その一つが命中した。爆風で良治は船倉にたたきつけられた。鼓膜が敗れそうなほど痛い、火がワツと広がり呼吸が苦しい。夢中で甲板にでると青空が広がっている。「まだ、生きている」と実感した。だが船倉で燃え広がった火のため、甲板は足踏みしなければ立ってられないほど熱い。退船命令に良治は太いロープにつかまり海に飛び込んだ。そして船が沈むときに巻きこまれないよう懸命に泳いだ。しばらくして後ろを見ると、船は大きな音をたてて真っ二つに割れ、高く火柱をあげながら沈んでいった。良治は海に漂う何人かの兵と一緒に筏につかまった。

いくつもの筏が海に漂っている。日本の飛行機が筏の上を飛び、翼を左右に振って飛び去った。助けに来てくれるのか、確かなことはわからない、待つしかなかった。

夜がきた、南海でも海水は冷たい。腹が減る、眠い、時々体をつつく魚の刺激に自分を取り戻す。夜空に広がる星に、良治は水神様のお祭りの提灯を思った。「クソッ、こんなところで死んでたまるか、生きて亀戸に帰ってやる」、良治は自分に何度も言い聞かせた。

夜が明けて、やっと救助船が来た。敵の来襲を恐れて、人数の少ない筏の人間は見捨てられ、十数人で筏につかまっていた良治は救出された。

「助けてくれ、助けてくれ」

数人の筏の兵士たちが必死で叫んでいる。良治はそうしたなかに明がないかと必死に探したが、見つめることはできなかった。救助船は、一人、二人で筏につかまっている兵士を見捨てフィリピンのルソン島についた。白い浜辺、青いコバルト色の海、戦争などないかのようだった。良治は「助かった」と感じた。

良治たちの部隊は再編成され、良治は通信部隊の護衛の任務についた。

通信兵たちの顔色や、ちょっととした言葉からも、日本が敗北に向かっていると良治は確信した。でも、戦争はつづけられ、原子爆弾が投下されて敗戦を迎えた。

八月十五日の昼、天皇陛下の重大放送があるとのことで、部隊全員が整列し、直立不動で玉音を聞いたが、よく聞き取れず、敗戦が文書で知らされたのは翌日の午後だった。

「もっと早く終わっていれば、明さんは死なずにすんだ。クソッタレ」良治の胸は怒りで一杯だった。

良治が日本に帰ることができたのは、終戦の年の秋だった。

亀戸一帯は焼け野原で昔の面影はない。自分の家があった所にくると、母は一人の若い女と一緒にバラック建の家に住んでいた。若い女はタエだった。母は良治を見るとすがりつき、タエはただ泣いていた。

「世話になってね」と母はタエを見た。「ごめんさい」、タエは良治の無事な姿を喜びながらも、自分がここには悪いように頭を下げた。

少し落ち着くと母はいままでのことを話し出した。

「兄さんは、戦争で亡くなってね」、母はぽつりと言った。「そのお骨も大空襲で燃えてしまった...」。良治は父や兄嫁、甥の亘がないのが気になった。まさか...

「父さんも雪絵も亘も、みいんな大空襲で亡くなってしまった...」

三月十日、大空襲の日の明け方はすさまじい爆音だった。飛び起きて空を見ると、深川、本所方面は天まで火が燃え広がり、その火が風下の亀戸めがけて押し寄せてくる。町会長をしていた父は、こんなときでも警防団の先頭にたって火を消そうとし、母には「近くの公園に逃げろ」とだけ言ったらしい。母は兄嫁と亘と一緒に公園にむかった。公園手前の工場はもう燃えていた。小さな掘割をみつけて人々が次々と飛び込んでいる、母も兄嫁や亘と一緒に飛びこんだが、後は記憶がないという。飛びこんだ瞬間、背中の上に次々と人の体が重なるのを感じた、そして、泥水を唇でかきわけながらすすったことを覚えているが、そのまま気を失ったという。気が薄れるなかで、火の粉の固まりがジューン、ジューンと掘り水に飛び込む音。「助けて、苦しいよ」「お母ちゃん、熱いよ」そんな悲鳴がかすかに耳に残った。誰かにゆり動かされて気がつく、母の背中に折り重なった人々は、死体として片づけられていた。母は、その人たちの下にいたので助かったのだ。必死で兄嫁と亘の姿を探したが見つけることができなかった。

「中川に行ってみると、たくさん焼けた死体が土手ならべてあった、そして岸辺でまだゆらゆらと揺れている死体もあった。一人一人の顔を一生懸命見たけど、お父さんも亘も雪絵もいなかった」と母は泣いた。

「道は死体で一杯だった。歩くとヌルツとすべるので、見ると人間の肉がめくられて白い骨がでていた、かまうものかと捜したが、見つからなかった...」

「もういいよ...」

良治は母の肩を抱きしめた。

母が、家の焼け跡で茫然としていると、若い娘さんが声をかけてくれた、それがタエだった。母は、その娘が良治が出征の日、遠くの電信柱の陰で泣いているのを覚えていたので、すぐ良治が「頼む」といった娘さんだと思い安心したという。そして、その日から一緒に暮らしはじめた。「本当によくしてくれてね、この人がいなくなったら生きていられなかった」。母はタエの顔をみながらしみじみと言った。

タエは洲崎の遊郭が立川などに引き払い石川島の工員宿舎になるとき、飯炊き女を募集したのに応募したのだった。そして、良治が出征すると聞いた日に、良治に書いてもらった住所を頼りに亀戸まで来て、丁度出征の場に出くわしたのだった。一言良治に声をかけたが、たがそんなところに出ていける身ではない、見を隠して電柱の陰で泣いているところを、良治の母に見られたのだった。

石川島の工員宿舎も大空襲で壊滅していた。それでもその伝手で、タエは食料を何とか確保し、母を支えていた。「ありがとう」、良治は頭を下げ、タエの手をにぎった。「そんな…」、タエはとんでもないと言っ様に小さく顔をふった。

良治は帰ったその日に、母の立会いのもとタエと夫婦になった。

みんな生きることには必死だった。日々の食料を手になければならない。

良治はタエの田舎だという千葉の銚子まで買出しに出かけた。東京生まれの良治には知り合いの田舎はない、少しでも縁があればと思つての買出しだった。利根川の河口から開けた銚子は漁業と農業が混在した地域だった。タエから聞いた住所は利根川沿いにあった。利根川でとれるシジミ、うなぎ、ハゼなどの漁で暮らしを立てている家も多い。もしも思いタエの弟や妹を尋ねると、みんな驚いたように歓迎してくれた。兄弟はみんなすでに家庭を持ち近隣に独立していた。みんな、姉のタエが娼妓となつて小さい自分たちのために金を作ったことを知っていた。しかし、近所には隠しておきたいことだった。そこに「夫です」と名乗る良治が現れ、聞けば戦争に行き苦労したという。また、東京の亀戸のメッキ屋の跡取だという。タエ姉さんがまともに結婚し、工場の若奥さんになる。それだけでも兄弟にとって大変な驚きと喜びだった。良治が交換の着物を出すと、「こんなもので」といいながら、米やイモ、そして魚の干物など出してくれた。干物は東京では貴重品だった。最初に訪ねた日には、近くの兄弟が集まり、良治にお茶をすすめ、タエの近況をうなずきながら聞き入った。そして、タエの父親がよく歌った歌だと、大漁節まで歌ってくれた。

一つとせ 一番づつに積み立てて

川口押し込む大矢声 この大魚船

……

十とせ 十をかさねて百となる

千をとびこす萬兩年 この大魚船

歌の響きに、良治はタエの率直さと逞しさを感じた。

兄弟だけでなく、良治はタエの名前を出して隣近所も訪ねた。どこの家でも「タエさんは」と聞く。「私のかみさんです、近く商売をはじめ準備してます。落ち着いたら寄って下さい。タエも喜びますから」と話すと、みんな懐かしがって、普通では出さない食料を出してくれた。しかし良治はそれに甘えるようなことはしなかった。相手が吃驚するような上物の着物と交換し、「タエさんはいい暮らしをしているようだ」と思われるようにした。それがタエとタエの兄弟にたいする良治の思いだった。タエもそのことを知って、いろいろと努力した。タエは安く着物を手に入れるコツを知っていた。洲崎近くの質屋が、娼妓の晴れ着を安く仕入れていたが売れる状況ではない、そこに良治が田舎で仕入れた米やイモ、干物など持ちこむと、「良治さん、タエさんを女房にしたあなたに惚れた、あなたに特別上物を安く流すから、あなたも銚子のものを頼みますよ」などと言いながら良い品物を良治に回してくれた。質屋も食べることに追われていた。

良治はこうして食いつなぎながら、メッキ屋を再開することにした。良治も少しは父から習った技術があったのと、母に昔の元気を取り戻して欲しい、タエの新しい将来をつくりたいと考えてのことだった。

母は良治が帰り一段落すると、夫や長男、兄嫁や孫の巨のことを思い、府抜けたような状態になることがあった。「わたしだけ生きていていいのかね……」。そんなことまでつぶやいている。そんな母にメッキ屋のかみさんの元気を取り戻して欲しかった、タエにも若おかみとして新しい人生を送ってほしかった。

昔の伝手を頼りに材料を仕入れて仕事をはじめた。世の中は生活が始まり出していた。親父が生きていれば怒られたであろうような品物も、丁寧にしっかりとした仕事であればよく売れ、そのうち大量の注文もくるようになった。母は元気を取り戻し、タエは良治からメッキの技術を習い真っ黒になって働いた。

毎日の生活に追われながらも、良治は恵姉さんのことが気になって仕方なかった。人の話で、恵姉さんが亀戸天神さまの裏で診療所を開いていることは知っていた。でも、良治はすぐには恵姉さんを訪ねることができなかった。

生残った自分は恵姉さんに何とさえよいか、明さんと同じ船に乗っていたのに自分だけ生残った。何か遺品でもあれば渡せるのに何も無い。そんな考えがぐるぐると回りを会いに行くことができなかった。でも「明あんちゃんの場合は伝えなければ」、そう思ったとき、良治は明が海に沈んだあのルソン島に行ってみようと思いついた。

ルソン島はあのと時と同じだった。どこまでも青い空、コバルト色の海。あちこち歩いてみると魚雷で砕けたサンゴの破片が散らばっている浜辺に出た。真っ白な砂のうえに、さらに白いサンゴがこんもりと山を作っていた。砕けたサンゴは真っ白で人骨のようだ。良治はその山を静かに崩しながら明の顔を思い浮かべた、すると柔らかな光沢をもった大きなサンゴがあった、明さんのようにおおらかで、優しい色をしたサンゴだった。

五

春のある日、良治は亀戸天神裏の恵姉さんの診療所を訪ねた。

天神様のなかを通って裏に通じる道をゆくと、藤がたっぷりとした姿で長く垂れ下がっている、昔のままの姿だった。真っ赤な二つのタイコ橋が美しい。社殿の横の木の枝には、願ごとを書いた紙がたくさん結び付けられ、真っ白な夾竹桃のようだった。

診療所門には、「加藤診療所」の表札があった。加藤は明の苗字だ、良治は恵姉さんの思いを知った。ちょっとした料亭や民家のなかに、診療所の白い建物はひっそりと建っていた。路地では子供が昔の良治や明や恵のように遊んでいた。ちょうど昼時だった。

ドアを開けると受け付けがあった。「恵姉さんに会いたいのですが」、「先生のことですか」。受け付けの女性は、先生のことを気安く「恵姉さん」と呼ぶ良治に不審をもったようだった。

そこに、声を聞きつけたのか、白衣を着たふっくらとした女性が顔をみせた。

「良治さん……」、恵姉さんは大きな声をあげたが、後は言葉にならなかった。良治は、診療室横の部屋に招き入れられた。

「明さんには軍隊でも本当に世話になりました。子供の時と同じように……」、恵姉さんは黙って聞いている。「輸送船に魚雷が命中し、海に放り出されて……、明さんを探したけ

れど…」

いつか良治は言い訳のように、海で助けられたこと、ルソン島でのこと、日本に帰ってからの亀戸での日々を話していた。

「もう、いいのよ良治さん」

「…」

「良治さんだけでも助かって良かったわ」

「…」

「父は明さんの死を覚悟していたのでしよう、私に医者になれと、それで女子医専に行き、医者になったの」

「そうですか」

「学徒動員で新潟に行き、終戦で東京に帰った時は家も焼け何もなかった、茫然としていると、良治さんのお母さんに会い、父も母も亡くなったことを知ったの」

母はそのことを良治に話していなかった。あまりに辛いことばかりなので話したくなかったのかもしれない。

「タエさんと言う人がお母さんを支えていたから安心したわ、それで私は学校の寮に入り、卒業してここで診療所を開いたの、前の場所では辛すぎたし、でも、亀戸からは離れたくなかったし、こうやって良治さんに会えて良かったわ」

恵姉さんはそう言いながら、昔と同じ、ふっくらとした笑顔をつくってくれた。

良治がルソン島で見つけたサンゴの破片を恵に手渡すと、恵姉さんは、緑のビロードに包まれたそのサンゴをしばらく眺め、両手で胸に押し付けた。

「こちらに来てください」、恵姉さんは良治を奥の部屋に案内した。それは恵姉さんの私室だった。部屋に一步入り良治はアッと驚いた。そこには恵姉さんと等身大の花嫁人形があった。

「明さんと結婚するときのために、父母が作ってくれた白むくを着せてつくってみました」、恵はサラリと言った。その花嫁人形の胸元には、黄色くなった和紙がお守りのように縫い付けてあった。良治にはそれが何であるかすぐわかった。「大切な恵」と書かれた和紙に違いない。「明さんは私のことを本当に大事に思っただけじゃなかった。私は、そんなに思われていることをありがたく思い、私は白むくを明さんの妻の気持ちで大事にし新潟まで持ってゆきました。そして落ち着いてから花嫁人形にして私の部屋においています。私を本当に大事に思ってくれた人がいたという感謝の気持ちで…、それで今日まで

生きることができました」。恵姉さんは良治から渡されたサンゴの包みをそつと花嫁人形の胸のなかに入れた。しばらく目をつむっていた恵姉さんは、静かに話した。

「良治さんね、私、あることで自分を納得させているんです」、「それは…」、「戦争が終つて、親を無くした子供たちが町にあふれている」、「…」、「そんな日本をみていると、明さんは何のために死んだのと思ひ、悔しくて、情けなくて、生きてゆく気力がなくなつたわ」、「本当ですね」、「でも、戦争の翌年、憲法ができたでしょ」、「はい」、「九条で『戦争は…永久にこれを放棄する』とも書かれたでしょう」、「はい」、「それを見て、私は明さんの死は無駄ではなかったと思つたの」、「…」、「父がよく言つてたは、医者として、一生懸命病気を治しても、その患者が戦争で死んだら、医者は何のための医者なんだつて…、でも、もう、日本人は戦争で死ぬことはないわ、だから私は医者になつたの」。

そして恵姉さんは、静かに微笑んだ。

あれから五十数年の月日が流れてた。

昭和の終る年、恵姉さんは亡くなった。棺のなかにはあの花嫁衣裳が入られ、胸元には、サンゴが首飾りとしてかけられていた。恵姉さんが周りの人に、戦争と花嫁衣裳とサンゴのことを話していたのだろう。お通夜の客からは「戦争は酷い、哀しい」の言葉が何度も出されていた。通夜の席で、良治は「明あんちゃん、恵姉さん、やつと天国で会えますね」と思いながら、線香の煙がゆつたりとのぼり、消えてゆくのを眺めていた。あの時恵姉さんが微笑んだように、この永い年月、日本には戦争はなかった。そして死ぬ人もなかった。それでこそ、明あんちゃんや、父、兄嫁、甥、そして何百万という人たちの死が無駄にならなかつたというものだ。

ところが、その九条を変えて、日本を戦争する国にしようとしている馬鹿野郎政治家たちがいる。

「ふざけんじゃねー」

良治の胸には、若い時と同じ怒りが込み上げてきた。

「俺はなんのために生き抜いてきたんだ…、このまま黙っていたんじゃ、明あんちゃんに申し訳ない、親父にも亘にもあの世で合わす顔がない、戦争の哀しさ、酷さを知らせることだ、おい、タエ…」、「

「あなた、そんなに…」。

タエが、新聞を睨んで久しぶりに昔の目をした良治を、笑つてみつめていた。

以
上